定本

小野十三郎全詩集

1926—1974

定本

小野十三郎全詩集

1926—1974

立風書房

定本
小野十三郎全詩集
1926～1974

昭和54年9月15日　第一刷発行

著者　小野十三郎
装幀者　多田進
発行者　下野博
発行所　株式会社立風書房
東京都品川区東五反田3—6—18
電話　東京03(447)1191（代表）
振替　東京(5)74493
印刷　信毎書籍印刷株式会社
印刷　株式会社美術版画社
製本　大口製本印刷株式会社
定価　5000円
©Tōsaburo Ono
Printed in Japan
0092-R8511-8909
乱丁・落丁本はお取替えいたします

定本 小野十三郎全詩集 1926〜1974 ／目次

半分開いた窓　7
古き世界の上に　55
大　阪（赤塚書房版）　103
風景詩抄　129
大海辺　181
抒情詩集　257
火呑む欅　275
大　阪（創元社版）　337
重油富士　347
とほうもないねがい　387

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

異郷 409
太陽のうた 469
垂直旅行 549
拒絶の木 625
補遺篇 677
収録作品一覧（初版本一覧） 711
小野十三郎年譜（寺島珠雄編） 723
・解説（長谷川龍生） 797
あとがき 805
編集付記 808

定本 小野十三郎全詩集 1926〜1974

半分開いた窓

序

アンドレ・ソーボリの自伝のうちに次のやうな文章がある。

「自分の全生涯を往来で過す癖に、犬のずぶ濡れになつてゐるやうな晩には他人の家の窓から何から何まで羨やましさうに眺める浮浪漢もある。が、一度だつて自分の部屋の片隅を棄てないで、自分の全生涯をぼんやりとして、小路はどんな風に走つてゐるか、それを何処から眺めやうかと、半分開いた窓際に立つてゐるかのやうな浮浪漢もある」

わたしの過去はまさにこの半分開いた窓に立つて外界を眺めてゐる第二の浮浪漢に例へられるやうな気がする。よしわたしの全生涯がさうでなくとも。

人生の平凡な並木路をそのまゝ瞳にうつして歩いてゐる人、街道に沿ふて歩いてゐく鏡その枕木の一本々々をたんねんに踏みかぞへて軌道をたどつてゆく憑かれた人、その人たちよりの自己の絶対的隔離。あらゆる人間性の中庸に対する意識的反撥、幸福、あらゆるブルジョア的幸福感の顚覆。こゝにわたしの「あまりにも心理的なる」二十歳的情熱と理智が集中した。「あまりにも心理的なる」反逆の旗が翻つた。わたしはわたしの生活をなげうつてまでこの異常な左傾せる「心理」の胸底を深く鋭く剔抉することにほとんど自虐的な執拗さをもつた。これがわたしの生命の躍動を感ずる唯一の境地であつた。悲しいかな唯一つの境地であつた。わたしのこの詩集はかゝる過渡期の一存在としての赤裸々な告訴である。さうして願はくば青年期の追憶ででもあつて欲しいのである。

一九二六年中秋　　著　者

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

第一部

林

秋になつて
郊外の林の中へ入つて行つた
林の中でみたものが魚の骨
林の中から丘の方をみると
あゝあゝたくさんの子供が赤青黒白で
赤青黒白が黄色い顔をちらちらさしてゐた

盗む

街道沿の畑の中で
葉鶏頭を盗もうと思つた
葉鶏頭はたやすくもへし折られた
ぽきりとまことに気持のいゝ音とともに
——そしてしづかな貞淑な秋の陽がみちていた
盗人奴！　とどなるものもない
ぼくはむしろその声が聞きたかつたのだ
もしそのとき誰かが叫んでくれたら
ぼくはどんなに滑稽に愉快に
頭に葉鶏頭をふりかざして
晩秋の一条街道をかけ出すことが出来ただらう
しかしあまりたやすく平凡に暢気に
当然すぎる位つまらなく盗んだ葉鶏頭を
ぼくはいま無雑作に

この橋の上からなげすてるだらう

街道にて

田舎の街道を行つたときに
ぼくは電柱を数えてゐた
一本でも数え損ねないやうにと
おちつかない散歩をつづけて行つた
そして二里ばかりきたときに
そんなにはつきりとしてゐた総計が
ふいと頭脳から消えて失つた
しかし電柱はずーとはるかに
街道に添ふて地平線にうすくつづいてゐた
ぼくは無気味な電柱の誘惑に圧倒されて
ついに苦しくなつた
そして田舎の悪臭に一層ものうくされたとき
すこしでも郊外にあこがれて出てきたぼくがなさけなかつた
遠い畑のはてで
玩具の電車が動いた。

十一月

ぼくが畑にゐると
大きな爆音がして
赤塗の自動車が街道をまつしぐらにかけてゐつた
小さな黒点となつて消えたくらゐに迅い

風がまひたつて家屋はしんがいした
畑の菊は落ちた
崖はくづれ
橋はおち
工場はやぶれ煙突もへし折れた
太陽がずるりと西方にひきづられた
十一月の午後のひなかのことである
ぼくは発狂しないやうにとつとめたが
最後に
どんなたいどで
ぼくはぼくの晩秋と
その場に来合した一人の野良女にむかわねばならなかつたか。

無蓋貨車

ぼくのあたまの中に
赤土を搬ぶ無蓋貨車がとまつてゐる
一台
機関車なんか忘れてしまつて

この秋

女の悲鳴がする
枯蘆の中から
——さうかしら

静かだ

大砲

雑木林のかなたで
大砲が鳴つた
殷々と秋の空にひびきわたつた

菊

秋の陽ざしに光るのは
黄色い菊です
季節を去るころ
因襲的に無気力に
大きなのや小さなのが
あちこちに
ぎらぎらと　ぎらぎらと　無数にきらめく
頭にまで映えわたる
菊　菊
菊には幻がない
つゝましやかなただそれきりの花である
ぜんりやうに身をまもる人のやうである
菊がぼくをみてゐる
顔を外らしても菊
眼をつむつても菊
十月のものうさは

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com